

SVリーグ目指してチームづくり イエロースターズ

地域とのつながり密にファン層拡大へ

イエロースターズは3月8日から札幌市中央区の北ガスアリーナに東京ヴェルディを迎えたホームゲーム2連戦に臨みました。これまで21勝1敗と東地区の首位を独走しているイエロースターズですが、8日の初戦もアウトサイドヒッターの郡浩也、山田滉太、ミドルブロッカーで札幌出身の岩崎航佑ら主軸選手が多彩

ボランティアで試合会場の設営をする
北海道スポーツ専門学校の学生



な攻撃を展開。東地区8位のヴェルディをあぶなげなく3-0で下して、詰めかけた1600人のファンを喜ばせました。

2016年に総合型地域スポーツクラブ・サフィルヴァのバレーボール部門として発足。2019年の旧Vリーグ(3部)加入を果たしてからはトップリーグを目指した選手強化を図り、2023年に親しみやすい地域に愛されるチームにと現在のイエロースターズに名称を変更しました。

●山田選手はリアルハイキュー!

チームを盛り上げるのが山田滉太選手。身長175センチながら最高到達点3m35cmの跳躍力を誇ります。バレーボールを題材にした漫画「ハイキュー!」の小柄な主人公ともキャラが重なることから「リアルハイキュー!」と呼ばれ、自身のSNSは17万人の

試合前の選手団陣に
ファンクラブ会員も参加



フォロワーがいて、道外からもファンが駆けつける人気ぶりです。

サッカーやバスケットボールに比べ、バレーボールはプロスポーツ化で後れをとってきました。その理由は男女とも日本のバレーボールをリードしてきた実業団が社員選手によるチーム作りをしてきた歴史が、選手のプロ化、外国人プロの参加、チームの経営確立などをめざすプロ化に大きな壁となっていました。

しかし、日本代表チームの低迷期を経て2018年から、チームのライセンス制を導入した旧Vリーグがスタート。地域に密着したプロクラブチームの参入や、国際大会での日本代表の活躍もあ

り、プロ化の流れはさらに加速し2024-25シーズンから新たなSV、Vリーグが始動しています。

●ファンとの交流重視 自治体との連携も

日本代表チームメンバーの石川祐希選手(イタリア・シル・サフェーティ・ペルージャ)や高橋藍選手(サントリー)のように、バレーボールでは人気選手にファンが集まり、いわゆる“選手推し”で盛り上がる傾向があり、チームも選手との交流を重要視しています。

イエロースターズもファンクラブメンバーの試合前に選手が組



地域連携協定を結び、ホームゲーム会場
地元産品を販売する沼田町

む円陣への参加や、試合後の選手との記念撮影などファンが選手と触れ合う機会をつくっています。ホームゲームを行う北ガスアリーナは座席数が2,000席。コート上の選手とファンとの距離が近いのはバスケットボールとともに競技の魅力です。

さらに新リーグのメンバーとして重要視しているのが、地域との交流。チームはホーム会場のある札幌市、函館市のほか、沼田町、滝上町、美唄市と包括連携協定を結び、シーズンオフの春から夏にかけて選手が訪れて住民との交流やバレーボールの指導をしています。

過疎化が進む滝上町では、高校が閉校し中学校にもバレーボール部がない状況にコロナ禍が加わり、町内でバレーボールに接する機会が失われていましたが、選手2人を派遣したところ、バレー教室に町民50人が集まりました。高齢者が多いので、今後は健康寿命を伸ばすフィットネスの指導で町内を活気づける計画です。

同じく選手が町へ出向き交流する沼田町はホームでの各試合沼田町コーナーを会場に設けて特産の地ビールやトマトジュース、地元米などを販売し、ファンへ町の売り込みをしています。

ホームでの試合運営は北海道スポーツ専門学校と札幌スポーツメディカル専門学校、とわの森三愛高校のバレー部と協定を結び、学生・生徒がボランティアとして会場づくりや物販、席の案内などに参加しています。

新Vリーグが立ち上がったばかりで、昇格ルールなどはまだ明文化されていませんが、その基準としてSVのチームには2030年までに5,000人規模のホームゲーム会場確保が求められています。バスケットボールBリーグのレバンガ北海道が使用する北海きたえーるの使用も視野に入ってくるため専門学校生らに加えて、チームは今後はスマイルサポーターズなど一般のボランティアにも協力を呼び掛けるとしています。